

「井伏鱒二と宮沢賢治の文学における郷土観」補論

―備後「穴の海」・古墳発掘に関する昭和十年代の情報と井伏作品をめぐって―

青木（秋枝）美保
（人間文化学科）

前稿「井伏鱒二と宮沢賢治の文学における郷土観」では、井伏鱒二と同世代の宮沢賢治における郷土観がいずれも、郷土の古代の生活に根差し、そこに自身の精神の自由を補償する「内なる故郷」を構築していたことを指摘した。本稿は特に井伏鱒二の場合を取り上げて、その背景に、同時代の古代史の研究成果があることを、昭和初期の地域発行の郷土誌の情報から実証的に示し、井伏の作品への影響を指摘する。

【キーワード】 井伏鱒二、郷土史誌、古代史発掘

はじめに

本稿は、広島大学近代文学研究会編『近代文学試論 第六十号 特集 地域性と文学（二）』（二〇二二年十二月二十五日発行）に発表した拙稿「井伏鱒二と宮沢賢治の文学における郷土観―地域の古代に根差す「内なる故郷」を視座として―」（科学研究費基盤研究C「作家の文学形成と「地方同学コミュニティ」―井伏・高田と宮沢賢治の場合―二〇二〇年度～二〇二四年度の研究成果の一部）の補論である。拙稿において紙数の関係で割愛せざるを得なかった根拠資料を示すと同時に、その後新たに発見した資料を含めて、前稿を補強する。それは、井伏の郷土観に影響を与えたと思われる、備後地域の古代史における研究状況を示す資料である。

拙稿では、井伏の昭和十年代に発表された郷土に関する二編の随筆に見られる古代備後の「穴の海」についての記述、および、幼少の頃に井伏生家付近にある古墳で遊んだということなど、備後古代史を視座に郷土の姿が紹介されていることに注目し、その記述の背景に郷土誌『備後史談』における同年代の情報があることを示唆した。その郷土の古代への関心は、比較対象とした、井伏と同世代の宮沢賢治の文学にも同様にあり、両者には、それら古代史への関心から郷土の世界観を立ち上げる方向性があったこと、さらにその世界観が両者の「自由な精神」を補償したことを指摘した。井伏の場合には瀬戸内海の海人文化、賢治の場合には岩手山麓の縄文文化（山人文化）を基盤とする世界観があることを指摘した。

本稿の目的は、宮沢賢治について拙著『宮沢賢治 北方への志向』（注1）で示したと同様に、井伏文学の郷土観の背景となった郷土文化史の研究状況を、実証的に示すことである。

1、井伏鱒二の郷土観の背景としての『備後史談』と昭和十年代の聖蹟調査

―郷土誌『備後史談』と郷土史家・濱本鶴賓―

井伏鱒二の郷土観を示す作品として拙稿でとり上げたのは、「郷里風土記」（『文芸』、改造社、第六卷第三号、昭和十三年三月一日発行）、「郷

里に寄す」（『知性』、第二巻第十号（十月号）、昭和十四年十月一日発行）の二編である。

随筆「郷里風土記」には、郷土について、次のようにある（注2）。

私の郷里は広島県深安郡加茂村である。初対面の人に云ふときには、郷里は備後ですとたいていさう云つてゐる。〔中略〕

備後は地勢的關係から東部の経済的中心地は福山市、西部の経済的中心地は尾道市である。〔中略〕ここは古い港で往時は軍事上の要港であった。足利尊氏なども四国で勢ひを盛り返して京都へ攻め入る前、三年間ほど尾道に軍を駐めて天下の形勢をうかがつてゐた。その三年間、尊氏は西国寺といふ古刹で坐禅をして一と振りの刀剣をこの寺に奉納した。その刀はいまでも保存されてゐる筈である。尾道よりも鞆の津はまだ古い時代の軍港であるが、今では画家や観光客の集まる遊覧地の觀を見せてゐる。この附近には神代以来の伝説的古跡がたくさんある。神武天皇の高島のお泊りをはじめ神功皇后が筑紫にお渡りになるときの水軍の根拠地など、その他いろいろ云ひつくせないほどたくさん古跡がある。しかしただ伝説的古跡にとどまるものか、役所でも史跡保存の方法を講じてゐない。北の山地にもいろいろの古い史跡がある。古事記で重要な比婆の山といふのはどの山か私は知らないが、比婆は今では伯耆でなく備後の領分である。むかし備後の盆地は奥行き深い入り海になつてゐたといはれるが、奈良の都と出雲との交通路はこの入り海の岸に沿つて通じてゐた。これは地理的にも考古学的にも史実的にも証明されてゐる。日本武尊が道中難渋されておいでになつたとき、一夜のお宿をお勧め申し御歎待申し上げた一土民の家は、いまでもその末孫といふ家族が英ちやんのうちの直ぐ裏の家で立派に暮らしてゐる。

〔中略〕このあたりから山地にかけて、南向きの斜面には古墳の集団がよく見つかつた。私も子供のとき裏の山で幾つとなく古墳を発掘し、土器をたくさん所有して遊戯のときに使用した。そのうちに瓢箪をつくることが備後全体の子供たちの間の流行となつて、私たちは土器で遊ぶのを止して瓢箪の苗を自分で植ゑ自分でその実の種子をぬき自分で磨いて遊ぶのであつた。

ここには、「古事記」、「日本書紀」などを起源とする神話との關係で郷里の来歴が語られている。

拙稿では、これらの記述の背景に、昭和十五年を神武天皇即位二六〇〇年とする紀元節の祝賀行事の一環として行われた、文部省主催の全国一府九県に所在する三十六ヶ所の聖蹟調査に係つて発表された著書や論文があることを指摘した。福山市・岡山市に關連する調査対象の一つが「吉備高島宮」であり、その比定地について論争があつた。それらを背景に、地域では郷土史についての関心が高まり、古代史ブームがあつたことを指摘することができる。

その文献は、管見に入つたものだけで、次のようである。

▲濱本鶴賓『吉備高原考』 1911（明治44）・未見（誠之館人物誌による）

▲濱本鶴賓『改訂増補 吉備高島考』 1912（明治45）・未見（誠之館人物誌による）

・兼田明逸『吉備高島宮記』大正会（沼隈郡田島村） 1915（大正4）

▲濱本鶴賓『吉備高島宮址』吉備高島顕彰会 1935（昭和10）

・池田春美 濱本鶴賓校閲『神蹟吉備高島宮』吉備片島顕彰会 1935・4・8

- ・得能正通 「三備各地の高島宮址」 『備後史談』 13巻10号 1937 (昭和12年) ・ 10
 - ・得能正通 「二千六百年記念大祭及び祝典 吉備高島宮舟師御進発」 『備後史談』 14巻6号 1938 (昭和13年) ・ 6
 - ・熊田宗次郎 「吉備高島宮の聖蹟」 『備後史談』 15巻1号 1939 (昭和14年) ・ 1
 - ・熊田宗次郎 「吉備高島宮址について」 『備後史談』 15巻3号 1939 (昭和14年) ・ 3
 - ・金原利道 「神武天皇奉祀神社の分布上より見たる広島県に於る聖蹟に就ての一考察」 『備後史談』 15巻3号 1939 (昭和14年) ・ 3
 - ・兼田高洲 「吉備高島史蹟考(一)」 『備後史談』 15巻3号 1939 (昭和14年) ・ 3
 - ・兼田高洲 「吉備高島史蹟考(二)」 『備後史談』 15巻3号 1939 (昭和14年) ・ 3
 - ・兼田高洲 「吉備高島史蹟考(三)」 『備後史談』 15巻4号 1939 (昭和14年) ・ 4
 - ・兼田高洲 「吉備高島史蹟考(四)」 『備後史談』 15巻4号 1939 (昭和14年) ・ 4
 - ・世良長造 『吉備高島考証』 吉備高島宮址顕彰会(岡山県小田郡神島外村役場内) 1939 (昭和14年) ・ 5
 - ▲濱本鶴賓 「中国鉄山文化和高島宮との関係」 『備後史談』 15巻5号 1939 (昭和14年) ・ 5
 - ▲濱本鶴賓 「中国鉄山文化和高島宮との関係(二)」 『備後史談』 15巻6号 1939 (昭和14年) ・ 6
 - ・「吉備高島聖蹟と上田氏一行の調査」 『備後史談』 15巻6号 1939 (昭和14年) ・ 6
 - ・「神武天皇聖蹟調査委員審査」 『備後史談』 15巻6号 1939 (昭和14年) ・ 6
 - 荒木文部大臣他 聖蹟36か所・一府九県
 - ・兼田高洲 「吉備高島史蹟考(完)」 『備後史談』 15巻7号 1939 (昭和14年) ・ 7
 - ▲濱本鶴賓 『水呑村の上古と聖蹟高島』 聖蹟高島顕彰会(沼隈郡水呑村役場内) 1940 (昭和15年) ・ 2
 - ▲濱本鶴賓 「高島埃宮聖蹟調査一家言(一)」 『備後史談』 16巻2号 1940 (昭和15年) ・ 2
 - ▲濱本鶴賓 「高島埃宮聖蹟調査一家言(二)」 『備後史談』 16巻3号 1940 (昭和15年) ・ 3
 - ▲濱本鶴賓 「高島埃宮聖蹟調査一家言(三)」 『備後史談』 16巻4号 1940 (昭和15年) ・ 4
 - ・「神武天皇高島宮聖蹟決定」 『備後史談』 16巻5号 1940 (昭和15年) ・ 5
 - 所在地 岡山県児島郡甲浦村大字宮の浦字高島
 - ▲濱本鶴賓 「高島埃宮聖蹟調査一家言(四)」 『備後史談』 16巻5号 1940 (昭和15年) ・ 5
 - ▲濱本鶴賓 「聖蹟高島の決定発表に就て」 『備後史談』 16巻6号 1941 (昭和15年) ・ 6
- 以上の様に、明治末年から始まった「吉備高島宮」の比定地に関する論争は、昭和十五年に岡山県児島郡の高島に決定することが文部省から発表され、最終した。これらの論争において、備後説の根拠として挙げられたのが、神辺平野に古代「穴の海」と呼ばれる入海があったという伝説であ

り、その海が畿内、あるいは出雲などとの交通の経路になったという地形的特性を示すことで説明されたことは拙稿で示した。

さて、前掲の通り、その論争は、郷土誌『備後史談』に逐一報告されており、その経緯をたどることができるが、『備後史談』とはどのような雑誌であろうか。『備後史談』創刊号（備後郷土史会、大正十四年一月十五日発行、復刻昭和四十五年一月、芸備郷土史刊行会・中国文化財保存顕彰会）から触れて置く。拙稿では、井伏の兄・文夫が、昭和二年一月に同会の常任理事となっている（『備後史談』第三卷第二号、昭和二年二月）ことは示した。

創刊号掲載の「備後郷土史会彙報」によれば、本会発足の経緯は、次のようである。

大正十二年四月初め 発起人会立ち上げ

石井貞之介（深安郡教育会長）他、備後地域の学校長、義倉財団理事等識者 30名あまり。

同年 七月七日、義倉図書館内で発起人会開催

会長・石井貞之介、副会長、理事を決定、事務局を義倉図書館内に置く。

大正十三年三月十六日 福山城公演内葦陽開館にて創立総会開催、会員二百余名。

同日 評議会開催

これとは別に、大正十三年四月から、「史談会」という研究会、あるいは郷土文化の顕彰会のような会が開かれ、地域の偉人にまつわる集会を不定期に開催している。また、東京では、「在京会員小集会」なる会も開催されており、郷土史に関心を持つ人々がその実績の顕彰に集結したと言つてよい。これらの会の理事に、濱本清一（鶴賓）、福山中学の井伏の恩師・福田祿太郎の名前も見える。大正十四年一月の会では会長に和田英松（文学博士）、その他、副会長、理事、顧問、評議員が役員として掲載されている。顧問の中に、井伏の作品にも名前が登場する五弓安二郎の名前も見える。

備後郷土史会の機関誌『備後史談』の主旨について、「発刊の辞」には、古くは「風土記」、「遙か下つては」近世の「地方誌編纂の事業」の隆盛を例に挙げながら、郷土の文化についての研究の必要性について主張している。その背景となっているのは、明治の「維新の当初」「我が文化思想に激変」が生じて、「旧物の破壊至る所に行われ」たこと、また「文明機関の普及は常に破壊的行為を取り」、「古き歴史の葬り去らるゝこと数知らず」、貴重な自然も資料も「廃亡滅裂に帰せんとするは事実なり」として、文明の進展に伴う文化遺産の消滅に警告を発する内容となっている。

前述の通り、会の立ち上げに関する最初の集会は、大正十二年四月であることを思えば、大正中期以降の第一次世界大戦の戦需景気とそれに伴う科学技術の進展、資本主義経済の本格化、都会文化の隆盛などの社会的な「激変」が背景にあるのはいうまでもなからう。その中で、「備後郷土史会」は、「国史の教育、国民精神の陶冶を主眼として」発足し、郷土の廃れ行く旧跡、事績を研究することによって、「璞玉為めに光輝を放つ」ものにしていく、としている。そして、会が直接の先達としたのは、江戸後期に藩命によって『福山志料』を編纂し、地域の教育・振興に業績を残し

た菅茶山であった。会では、その表現として、雑誌の題字を会員所蔵の菅茶山「遺墨」から取った旨、創刊号「編輯余録」に記している。また、その見開きには、廉塾における第三回史談会参加者の集合写真が掲載されている。

これらの活動の背後にあるのは、郷土の文化の消滅に対する危機感である。その共感のもとに、有志が集まって声をあげたのであり、その活動の実務的な役割を担ったのが「義倉財団」であったということである。

さて、井伏鱒二の兄・文夫は、加茂町栗根の自宅を発行所とする雑誌『郷土』を発行しており、小学校の教員の傍ら、地域への啓蒙活動を行っていた。この雑誌の編集には、井伏も協力していたという。当該雑誌の「巻頭言」「編輯後記」が『井伏鱒二全集 別巻一』（注3）所収の「井伏文夫遺文」に掲載されている。その巻頭言は、前掲の『備後史談』の「発刊の辞」と主旨に共通のところがあある。「現代社会が一般に外形的文化を求めめる傾向」にあるとし、「西洋直訳的都会文明」に「一種の誘惑を感ずる」「質朴な農村青年」に対して、また「現代を独自の文化なき農村社会のために」「わが郷土文化の開拓を念ずるわれらは深安新青年のちからによつて成さるゝ新深安創造の首途を記念すべく『郷土』の発刊をなしたのである」と宣言している。全集の解説によれば、雑誌『郷土』の創刊は大正十二年一月で、終刊は昭和二年五月である。文夫は、前述の通り、昭和二年に後郷土史会の常任理事に就任しているが、それは『郷土』終刊が契機と推測される。このように、井伏の周囲には、郷土の文化に対する熱い思いが沸々と沸き起こっていたことを指摘することができる。

ちなみに、そういった動きは、全国的にあつたと想像されるが、その一端に、深安郡出身の漢学者・小野桜山（一八五二〜一九三七）が収集した一万冊に及ぶ「耶馬溪文庫」がある。筆者らは、二〇二二年十二月二十二日に、福山大学ブランディング事業・プロジェクト課題研究「福山義倉」の文化的ネットワークとその継承―菅茶山・井伏鱒二を軸に」（三菱財団法人文学部研究助成に採択、二〇二三年一月〜二〇二四年十二月）の調査で、その実態を調査した（注4）。これは、明治二十年ごろ、三十五歳の桜山が、明治になって読まれなくなり、捨てられるべき書物を、一千余人の人々に寄贈を依頼して集めたというもので、その主旨から、当初「反古文庫」とされていた（「反古」は、ゴミくずのこと）のであるが、その主旨は『備後史談』発刊の意図とも重なるものである。小野桜山は興譲館とも深い関係があり、備後郷土史会のメンバーとは、おそらく漢学文化圏のネットワークにつながるものである。ちなみに、桜山は大正十五年には、朝鮮半島から中国にわたり、漢文学発祥の地を訪ねて、文人に逢い、書籍を多く持ち帰ったという。（注5）

これらの事例からは、大正末期の地方における郷土の文化への再評価の動きを知ることができる。井伏の「在所もの」の淵源を、ここにも見ることが出来る。それは、宮沢賢治の『注文の多い料理店』の広告文にも見ることが出来る共通の動きと言える。

このような郷土の文化的状況を背景に、井伏は『備後史談』から郷土についての情報を得て、作品に活かしていたと思われる。本稿においては、前述の郷土に関する随筆「郷里風土記」と、「穴の海」に関連する随筆的作品「架空動物譜」と、「備後史談」における情報との関連性を指摘し、昭和十年代の井伏の作品との関係について考察する。

2. 「郷里風土記」における「古墳」と『備後史談』における「古墳」についての情報

『備後史談』には、古墳を始めとする埋蔵文化財発掘の情報が随時掲載されている。その中で最も大きな紙面を使って報告されているのは、昭和三年七月十七日に行われた、早稲田大学の西村真次博士の発掘調査である。これは、『備後史談 第四卷第八号』（昭和三年八月十五日発行）で、「西村博士史蹟踏査記念号」という特集号となっている。そして、その記事は、濱本鶴賓の「穴の海」への関心に貫かれている。巻頭は、濱本清一著「蘆品深安沼隈三郡に於る西村博士の史蹟踏査」と題する記事で、発掘状況を「穴の海」との関連で紹介しているが、それに続いて、鶴賓外史（濱本の号）著「穴の海に絡まる伝説 人魚と中條鰯、河童と茂兵衛、片山病と漆船」と続くのである。

実は、鶴賓外史（濱本の号）著「穴の海に絡まる伝説」は、井伏の随筆「架空動物譜」（『文芸春秋』第十一年第七号（七月号）、昭和八年七月一日発行）という空想上の水生動物について述べた文章に引用されているのだが、これまでその所在を発見できていなかった資料なのである。これは、前掲の拙稿にも所在不明としていた。その資料が、古墳調査の記事を探した際に同時に見つかったことは、興味深い。つまり、濱本清一（鶴賓）の関心が、備後の起源としての「穴の海」という地形的特徴にあり、それが備後の政治的、文化的な事象との関連で理解されていることを物語っているからである。濱本にとって、備後の世界観は、まさに「穴の海」を中心としてあると言える。

これからすると、井伏の「郷里風土記」の郷土の説明は、まさに、この濱本の文章をなぞっていると行って間違いない。濱本清一著「蘆品深安沼隈三郡に於る西村博士の史蹟踏査」の冒頭は、次のようである。

吉備の穴ノ海沿岸一帯の丘陵平野は、鴻荒の太古に於て、人類生活上の要素を具備し、遠き我等の祖先や尚遡つて原住民の棲息繁栄したところ、有史以前から今日まで、幾多奇しき神秘を裏んで居る。史蹟のやゝ明なるものは建速素戔嗚尊の龍舟を舩して南海にい出まし、疫隅、神日本磐余彦天皇の東征策源地たりし高島、出雲と大和との交路の衝に立つた品治を始め、大吉備津彦の巡撫と父孝霊天皇の御足跡を繹めべく、日本武尊の穴ノ海の悪神を討伐し給へる、神功皇后の海神に奉賛し給へる、仁徳天皇の山方に行幸し給へるなど、夫れから夫れと、尊き史蹟は連珠の如く点在して居る。

このように、記紀神話の事績を列挙して、「吉備の穴ノ海沿岸一帯」の歴史的意義を強調しているところは、井伏の文章にそのまま受け継がれている。

この発掘調査は、七月十三日から二十二日にわたって行われたようである。その調査の始まりは、府中の粟生村の「南宮神社」「孝霊天皇陵伝説地」に近い向山の古墳の調査で、「前方後円式横穴石室」、および「遺物」の内容について述べ、「此辺一帯の古墳群や遺物から推すと、大和朝廷建設以前から原日本人の栄えた土地らしく、三方山を繞らし一方河海（穴ノ海）に臨み、古代人の栖息地として理想的である」と「鑑定」し、「二〇〇〇年以前」から「一五〇〇年以前」のこの地域の豊かな生活を想像している。

これに続いて十五日は、「国分寺国司遺蹟」の調査で、「栗栖の寺屋敷と称する、国分寺址伝説地」を調査、「深安郡御領の国分寺」との「比較研究」がなされることとなった。その後「国府村字府川」で「国司庁の在ったといはるゝ二宮神社付近の地形」を調査、「粟生村字用土」では「吉備神社旧鎮座地」、孝霊天皇にまつわる伝説地、御門神社と「古身体」を調査している。この地について、濱本は、この地が「京都と太宰府を結ぶ

山陽大路の通ったところ」で、「政治の中枢地」であったとその意義を解説している。

十六日は資料整理、十七日は「御野の国分寺及湯田道上」の調査で、「深安郡御野村大字御領」に向かい、御野村村長から地域に伝わる資料を踏まえての説明を受けた後、国分寺の礎石を探索したとある。発掘した埋蔵文化のうち、特に石器について「原住人種若しくは原日本人の使用した石鍬石斧砥石類が数多く此の地から出て居る」として、「往古の穴ノ海沿岸で、備後文化の萌したところを知るに足る材料」と重ねて述べている。これらの発掘調査の記録として「東京理科大学人類学教室の調査」の成果を紹介し、従来の石器発見地として春日村浦上、大津野村大門、引野村、湯田村、御野村、中條村、道上村亀山（沼隈郡を除く）を挙げています。

その後湯田村本湯野の上持の古墳址、小山池畔の丸山を踏査、丸山は「三段式前方後円の大古墳」だという伝承があるところで、その他、博士が湯田村の茶白山、道上の亀山なども、「何れも調査をすれば大古墳であらう」と述べたと述べている。その後、亀山の岡山神社付近の発掘調査、そこで石器の破片、および弥生式土器の破片を発見、「古くより原日本人の棲息した土地であることを博士は声明された」とある。

二十二日は、「高須柳津両村の貝塚」の調査で、昨年発掘の「沼隈郡高須村字太田の貝塚」、山本新氏「新発見の貝塚」を「同郡柳津村字王子」で調査、それぞれ、石鍬と弥生式土器の破片、「アイヌ式土器の破片と歯のついた獣骨」を採取したとある。

この調査には、備後郷土史会会員のほか、村長、新聞記者などが同行し、歓迎会には村会議員、村吏員、小学校教員等が参加したとある。雑誌には、山陽新報、中国新聞、中国民報、大阪毎日、大阪朝日各紙の報道記事の掲載が続いており、この調査の反響の大きさが想像される。

なお、西村博士の調査は、昭和四年七月にも行われており、『備後史談』第五卷第九号にその報告がある。

3、「架空動物譜」における「鶴賓外史の「穴の海に絡まる伝説」の引用について

前述のように、雑誌『備後史談』第四卷第八号の巻頭に、西村博士の古墳調査の記事があり、それに続いて鶴賓外史（濱本鶴賓の別号）著「穴の海に絡まる伝説―人魚と中條鰯、河童と茂兵衛、片山病と漆船」が掲載されている。

これについては、前述したように、井伏の随筆「架空動物譜」（昭和八年）に次のように登場している。（注6）

その旅行（引用者注―系崎への旅行）の帰りみち、私は理由なく大津駅で下車した。そして駅前の旅館で鶴賓外史の「穴の海に絡まる伝説」を読み、偶然にも琵琶湖畔に人魚塚のあることを知った。けれど私はその所在がわからなかつたので、また私たちに無用な人魚塚など、どうしてこんなに自分は見たがつてゐたのであらうと反省して、見に行くのは止にした。鶴賓外史の文章で判断すると、人魚塚といふものは相当地に芸術的にできあがつてゐるものと思はれる。

「架空動物譜」は、空想上の水生動物―人魚、河童、龍―について、世界各地の同様の「架空動物」と比較しながら、その神秘について述べたもので、最終的には東洋の龍のイメージの生命力について賞賛して終わっている、というものである。そこには、濱本の「穴の海世界観」が影を落とされている。

鶴賓外史の「穴の海に絡まる伝説」は、海水浴場で泳ぐ「人魚の群を見た」という幻想（と思われる）から、少年時代に読んだ「八犬伝」の挿絵

に「眉目麗はしい人魚の口絵を見たこと」を思い出し、次のように始まっている。

——世に若しこんな女人が居たならばと、不思議に聯想を喚び起す。西国巡礼の札所近江の観音寺が、美しい人魚の哀願によつて聖徳太子の建立された大伽藍なることなど想ひ浮べ、琵琶湖畔の人魚塚を偲び、果ては穴の海の人魚伝説まで床しくなつた。

このような人魚にまつわる「聯想」から「穴の海に絡まる伝説」へと筆を向けていく。「絡まる」とは「関連する」というほどの意味であろうが、中條、片山という、現在では、海から遠い備後福山の内陸部に伝わる海に関連する不思議な伝説を紹介し、その根源に「穴の海」沿岸に暮らす人々の心情をうかびあがらせている。

その第一話は「中條鰯」の話である。それは、江戸後期の地誌「西備名区」に「袖中秘記」から引用したとして語られているもので、「元龜天正の頃」中條（深安郡）にいた修験者が、全国行脚の折り信州に立ち寄つた際、昔人魚を食べて「数百歳」の長寿を保っているという老婆に逢い、中條は今も漁業で栄えているかと聞かれて驚くという話である。濱本の文章に引用されている老婆の言葉は次のようである。

中條は海に臨める海人の里にて、南に八ひろ、千田の網代、中島、五箇手島、鮒附の漁場あり、鵜飼ひ網引は其の北に連り、西は中津海の瀬戸にありて大海に通じ、鰯は殊に多きものを。

こういった類話は全国にあると、濱本は述べている。そこには、「穴の海心性」とでもいふべき、「海に絡まる」心情があり、その地域の生活感情として長く定着していることを知ることができる。これについて、濱本は次のように述べている。

半鹹半淡の穴の海と、半人半魚の人魚とは伝説として至極ふさはしいものである。琵琶湖や出雲の中ノ海や宍道湖に人魚伝説が多いやうに、穴の海に此伝説の一つ二つあるのは当然であらう。

第二に河童の話はさんで、最後は「片山病と漆山」に関する伝承、「漆船転覆伝説」を紹介している。「片山病」は、現在では「日本住血吸虫」が原因であることがわかっているが、古くはその原因について、この地を通行する船が大風で転覆し、積み荷の漆が海中に飛散し、また海底に沈んだからだとする伝説があつた。濱本は、「福山志料」にもそれについての言及があることを示し、沼隈郡山手村の医藤井好直のものとする文章を引用している。

西備神辺駅の南の田の中に小山一あり碇山片山といふ片山一に漆山といふ、相伝ふ往古商船あり漆を載せ来り碇泊す、大風船を覆し因て名附づく、昔時此を過ぐる者皆感染すといふ。

この寄生虫は、片山貝（別名ミヤイリガイ）という巻貝を中間宿主として経皮感染することが知られている。

このように、福山市内陸部に伝わる海にまつわる不思議な伝説は、古代の「穴の海」の証拠として濱本の内面に深く根付いていると言える。

4, 『備後史談』における「穴の海」世界観と井伏鱒二の初期作品における河海のモチーフ

——西村博士古墳調査特集号における濱本鶴賓の記事を見る——

以上のように、『備後史談』第四卷第八号における濱本鶴賓の二編の文章は、一貫して「穴の海」という古代の地形的特徴から発する備後の世界観を描き出している。古墳調査は、古代の生活を物的証拠から実証することであり、「穴の海に絡まる伝説」についての言及は、人々の心に伝わる心的証拠から「穴の海」の実在を証明することであった。

この二つの観点は、古代史の研究方法として取られる客観的な方法であることを強調しておきたい。郷土史を語る際、心的証拠である神話や伝説など伝承文化については空想上の話しとして軽視する傾向が一般にはあるからである。郷土史研究の大家・村上正名氏（広島大学教育学部福山教場教授）は、その著書『瀬戸のあけぼの』（注7）において、古代史研究の方法について、神話を含めて広く語り継がれてきた風俗習慣から古代社会の様子を知る方法と、当時の遺蹟遺物に歴史を物語らせる考古学的な研究の二つがあることを示し、それぞれで業績を残している。特に後者については、村上正名編『備後の伝説』第1集〜第3集（注8）があり、濱本が紹介している伝説を同様に掲載している。

濱本が語る「穴の海」に関する地域史の著作には、古代からの備後の歴史に根差した「内なる故郷」に遡及するエネルギーが感じられる。そのエネルギーは、井伏の心をも動かしたと考えられ、井伏は、そこから郷里の先達の文章に影響を受けながら、自分の作品世界の構築に向かったのではないかと推察される。初期の作品、「山椒魚」（昭和四年五月『文芸都市』第二巻第五号、注9）を始めとして、「架空動物譜」（昭和八年七月発行『文芸春秋』第十一巻七号、注10）、「さざなみ軍記」（昭和五年三月『文学』第六号〜昭和十三年四月『文学界』第五巻第四号まで断続的に発表、昭和十三年四月河出書房から『さざなみ軍記』として刊行、注11）、「ジョン万次郎漂流記」（昭和十二年十一月、記録文学叢書八、河出書房、注12）と、海に係る作品が、昭和十年前後に発表されている。これらは、『備後史談』で、濱本鶴賓がしきりに「穴の海」についての文章を発表していたところであり、その始まりには、早稲田大学の西村教授の古墳調査があったのである。それは、兄の文夫が雑誌『郷土』を終刊させた後で、『備後史談』の常任理事になった直後のことであった。

井伏鱒二の「在所もの」の起源に、「穴の海」伝承があったと言っても良いのではなからうか。そして、井伏の作品の背景を探る中で、「穴の海世界観」が現代における地域誌にそのまま受け継がれていることを知ったのである（注13）。それは、下記のような資料に繰り返し語られている。

『福山市土地改良区中津原工区史』中津原工区編集委員会編、発行責任者、戸田勇、一九九五年

『備後福山 みゆき町の昔ばなし（二）——水とのたたかい』御幸町郷土史研究会編、二〇〇二年

『わが郷土備後 下加茂史談』下加茂郷土誌編纂委員会編、下加茂町内会連合会発行、二〇〇七年

このことは、井伏の郷土観が、深く地域の郷土観に根差すものであると同時に、現代にも共有されていることを示すものである。

井伏鱒二文学の独自性「在所もの」の調査は緒についた所である。その後にそれがどう展開していくことになるのかは、今後の課題とする。

注1 秋枝美保『宮沢賢治 北方への志向』（朝文社、一九九六年九月）

注2 『井伏鱒二全集 第七巻』（筑摩書房、一九九七年一月）所収。

注3 『井伏鱒二全集 別巻一』（筑摩書房、一九九九年九月）所収。

- 注 4 研究代表者・青木美保、共同研究者は、清水洋子（福山大学准教授）、柳川真由美（福山大学准教授）、前田貞昭（兵庫教育大学名誉教授）、竹村信治（広島大学名誉教授）、市瀬信子（福山平成大学教授）。本調査は、前田・青木が行った。
- 注 5 荒木見悟「耶馬溪文庫とその周辺」〔耶馬溪文庫目録〕 大分県中津市HPによる）
- 注 6 『井伏鱒二全集 第四卷』（筑摩書房、一九九六年十二月）
- 注 7 村上正名『瀬戸のあけぼの』（広島大学教育学部福山教場郷土史研究部、一九四九年）
- 注 8 村上正名編『備後の伝説』第1集〜第3集（広島大学教育学部附属福山中学校郷土研究部編、一九五六年）
- 注 9 「山椒魚」（『井伏鱒二全集 第一巻』、筑摩書房、一九九六年十一月）所収。
- 注 10 「架空動物譜」（『井伏鱒二全集 第四巻』、筑摩書房、一九九六年十二月）所収。
- 注 11 「ジョン万次郎漂流記」（『井伏鱒二全集 第六巻』、筑摩書房、一九九七年六月）所収。
- 注 12 「さざなみ軍記」（『井伏鱒二全集 第二巻』、筑摩書房、一九九七年二月）所収。
- 注 13 筆者は、二〇二二年五月二十八日に開催された「福山城400年博・Fukuyama Castle Expo 2022 羽賀自治会 歴史講演会第1回 穴の海、穴戸って何？ー井伏鱒二とめぐる瀬戸内ー」という講演に際して、その内容を調査する過程で、福山市内の各地域で編纂された地誌を閲覧したが、どの資料も必ずその歴史の起源に「穴の海」のことを語っており、地域に伝わるその地図を掲載しているのを知った。そして、羽賀地区では、豪雨災害で流された沈下橋の再建に向けて、地域における芦田川との取り組みの歴史を学び、その川への思いを新たに継承する活動を始めたとのことで、そこに現代に継承される地域の風土への思いを実感することができた。

The Addendum about the Paper “The Viewpoints about Hometown
by Masuji Ibuse and Kenji Miyazawa”

—About the Relationship between the Works by Masuji Ibuse and the Information
about “Ana no Umi” in Bingo and Ancient Tombs Excavated that They were Reported
in the Local Magazines in the 1930s —

[Masuji Ibuse, local history magazines, excavation of ancient history]

Miho AOKI/AKIEDA

The previous paper said that the viewpoints about hometown by Masuji Ibuse and Kenji Miyazawa are rooted in the life of local ancients, and there the two authors had “inner hometown” that compensate for free spirits. This paper said that Ibuse’s works are influenced by information about ancient history reported in local magazines. In fact, comparing his works with the information in the local magazines, this paper will reveal the uniqueness of his works.